

2. クラブチーム取材

本章では、「浜松アークスピリッツ」「北摂ベースボールアカデミー」「浜北太陽野球スポーツ少年団」という3つの野球チームの取材内容と、第3回セミナー講師の中桐氏が立ち上げた「ジュニア・エンジョイ・ベースボール・コミュニティ」(JEB)運営メンバーによる座談会の様子をまとめている。すべての対象が野球関係者となった背景には、保護者の負担という観点で、野球がほかの競技に比べて課題が顕在化しやすい特性があるといえる。一般的に保護者、特に母親の間では「野球を習わせるのは大変」という認識が強いが、データ上でもその実態が確認できる。以下では、2021年度に実施した「小学生のスポーツ活動における保護者の関与・負担感に関する調査研究」から、野球を習っている子どもの母親がどのように活動をささえているのかを示すデータを紹介する。なお、データはすべて第3回セミナーでコーディネーターが使用した資料から転載している。

ここでは有効回答2,400名のうち、「野球」「サッカー」「水泳」「バレエ・ダンス」「バスケットボール」「テニス」「武道」「体操教室・体育教室」の8種目を実施している948名を分析対象とした。回答者の子どもが習っている競技種目は多岐にわたるが、ケース数の多い上記8種目に絞っている。なお、複数の種目を行っている場合には、保護者がより関わっている1種目を選択してもらった。また、ここでの「武道」には空手、相撲、少林寺拳法、合気道などが含まれるが、剣道と柔道は別項目として扱っているため含まれていない。各種目の詳細なデータは割愛し、野球を中心に考察を行った。

図表2-1では、家庭内やチーム内でのサポートについて、母親が「よくする」と回答した割合を種目別に算出している。8種目の数値を高い順に左から並べ、野球が該当するセルは太字とハイライトで強調している。野球は19項目中14項目で、8種目のうち最高値を示し、多くの母親が家庭やチーム内で子どもたちをささえるために高頻度で関わっていることがわかる。

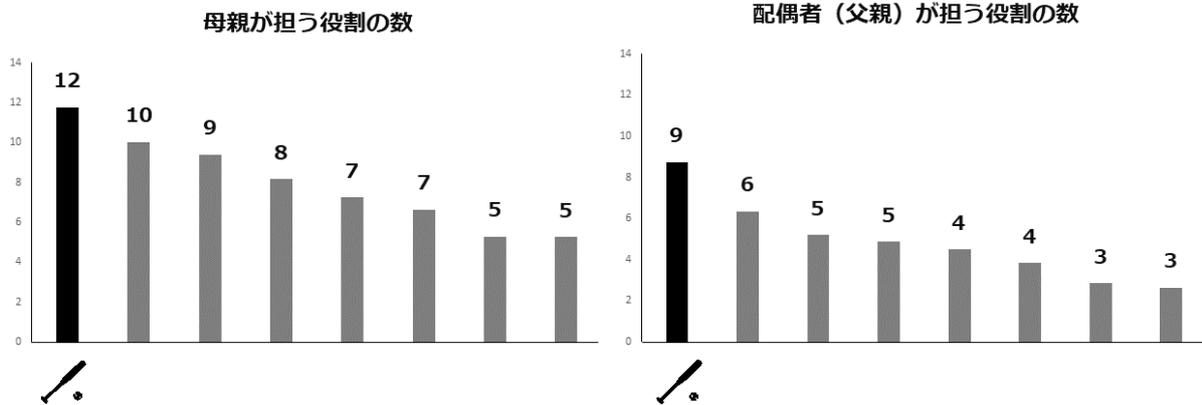
図表 2-1 母親の関与(種目別)

		最も高い種目						最も低い種目	
【家庭内】	弁当づくり	33.3	12.2	11.3	5.1	4.7	4.3	2.4	1.1
	ユニフォーム等の洗濯	90.2	84.3	78.2	77.7	69.4	62.5	58.5	56.4
	お子様の送迎	83.0	80.0	77.3	76.9	72.2	70.6	70.4	69.4
	練習の付き添い・見学	43.1	38.3	36.7	29.4	28.2	26.4	24.3	21.6
	自主練習	21.7	16.3	13.7	11.4	7.7	6.8	5.7	2.2
	大会や試合の付き添い・見学	54.9	47.2	42.1	37.1	32.7	5.7	5.1	4.1
	スポーツ用具の購入	48.6	45.9	45.3	45.1	44.9	30.8	27.4	17.0
	ルールの勉強	29.4	18.9	16.3	12.9	10.5	7.7	4.4	2.3
	【チーム内】	お子様以外の子どもを送迎	17.6	16.0	15.8	12.2	11.4	10.0	7.7
お子様以外の子どもの飲食の手配		15.7	12.2	11.3	9.8	7.7	5.7	3.4	2.9
クラブの練習の補助		8.5	7.8	7.1	6.1	4.5	2.6	2.3	1.5
クラブの練習の指導		7.8	6.6	6.1	3.4	2.6	1.5	1.5	1.4
活動場所の手配や予約		5.9	4.7	3.0	2.6	2.3	2.0	1.4	1.2
指導者や保護者の送迎		5.9	3.8	2.3	2.0	1.4	1.0	0.0	0.0
指導者・保護者の飲食手配		5.3	3.9	2.9	2.8	2.0	0.2	0.0	0.0
大会等の観戦場所の確保		7.8	3.8	2.3	2.0	1.4	1.1	1.0	0.0
指導者・保護者間の連絡や情報共有		15.7	13.5	12.3	7.1	6.1	4.5	2.6	1.5
メーリスやSNS・ホームページの管理		5.9	4.7	2.9	2.3	2.0	1.0	0.8	0.0
会費の集金や管理	5.9	4.7	4.1	3.0	2.7	2.3	0.0	0.0	

注)「よくする」の%。

図表 2-2 では、図表 2-1 の各項目で「まったくしない」以外の回答をした項目数の平均値を示している。「よくする」割合だけでなく、頻度は低くても何らかの関与をしている母親・父親の割合を表しているといえる。これをみると、母親・父親ともに野球が最多であり、野球の特徴として、母親だけでなく父親もさまざまな関与をしている様子が浮かび上がる。

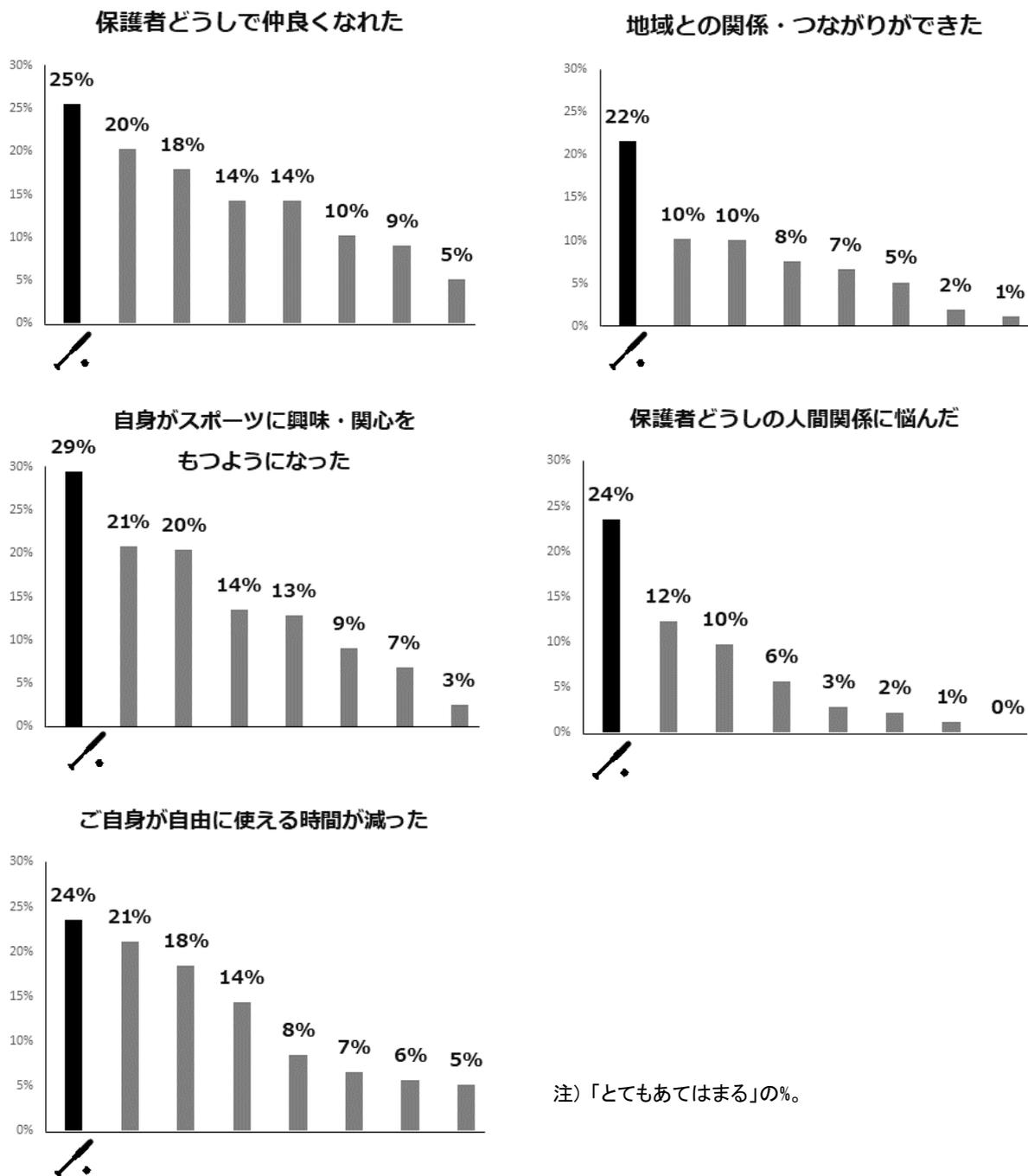
図表 2-2 母親の関与・父親の関与(種目別)



注) 図表 2-1 に示した各項目で「まったくしない」以外の回答をした項目数の平均値を表す。

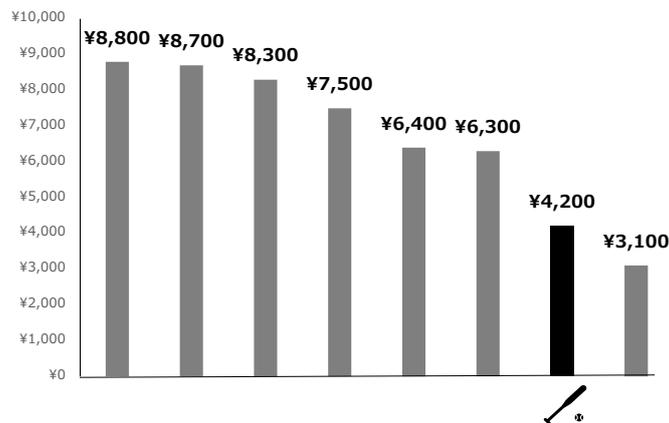
子どものスポーツをささえる中で、保護者自身も変化を感じることもある。図表 2-3 では、子どものスポーツ活動を通じた母親自身の変化をたずねた項目に関して、「とてもあてはまる」の割合を種目別に示している。ポジティブな変化をみると、「保護者どうしで仲良くなれた」「地域との関係・つながりができた」「自身がスポーツに興味・関心をもつようになった」は、いずれも野球の母親が最も高い。特に「地域との関係・つながりができた」は、ほかの種目に比べて 2 倍以上の割合である。一方で「保護者どうしの人間関係に悩んだ」「ご自身が自由に使える時間が減った」という悩みについても、野球の割合が最も高い結果が示されている。

図表 2-3 母親自身の変化(種目別)



このような結果の背景には、野球は民間企業が運営する教室やクラブよりも、地域のクラブチームで活動するケースが多い点あげられる。本調査で所属するクラブの種類をたずねたところ、取り上げた 8 種目のうち水泳、バレエ・ダンス、テニス、武道、体操教室・体育教室の 5 つは民間の教室やクラブが大半を占め、サッカーでは民間と地域のクラブがほぼ半々、野球とバスケットボールは地域クラブが主となる傾向がみられた(図表割愛)。一般的に地域のクラブは会費が安価に抑えられ、図表 2-4 で月額平均支出を確認すると、野球は 4,200 円と 8 種目の中で 2 番目に安く、高額な種目の半分程度である。その代わりに指導者やスタッフがボランティアで指導・運営をしているケースも多く、保護者の当番制も広く取り入れられ、負担感の高さにつながると推察される。

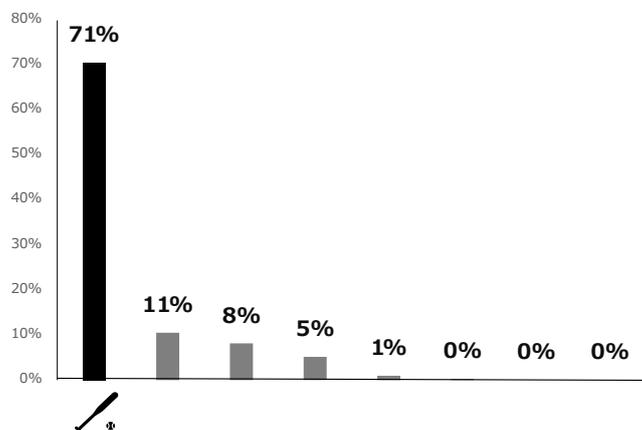
図表 2-4 活動にかかる 1 ヶ月あたりの平均支出(種目別)



もうひとつの背景として、野球の活動時間の長さがあげられる。図表 2-5 では 1 回あたりの活動時間が 3 時間以上の割合を示しているが、野球は 71%でほかの種目よりも圧倒的に高い。活動時間が長い分、飲食の準備やけがの手当て、送迎の負担も増え、全体を管理する役員の仕事も必要となる。

このように、地域クラブの運営形態と野球の活動特性が相まって、保護者の負担が増加しやすいと考えられる。近年、野球の指導現場では保護者の負担軽減が課題として意識されるようになり、その解決に向けた取り組みも進められている。取材したチームでは、保護者の負担軽減だけでなく、活動時間や指導方針の見直し、怒声・罵声の禁止など、幅広い改革が行われ、子どもも保護者も楽しめるスポーツ環境の実現に向けた具体的な示唆に富んでいる。

図表 2-5 1 回あたりの活動が 3 時間以上の割合(種目別)





「めっちゃ楽しい!!」野球教室

20代監督、新天地で挑む指導への思い

浜松アークスピリッツ (静岡県浜松市)

監督 石井 悠喜 氏

2023年8月20日(日) 2024年7月13日(土) 訪問

2024年4月、静岡県浜松市に練馬アークスジュニア初の姉妹チームである浜松アークスピリッツ(以下、浜松 AS)が発足した。監督は練馬アークスジュニアのコーチも務める石井悠喜氏で、浜松市内の複数の野球場を利用して活動している。指導理念には、練馬アークスジュニアと同様に「保護者の業務負担ゼロ」を掲げ、大会での結果を目的とせず、軟式野球連盟には加盟せずに活動している。

1. チーム発足の経緯

石井氏は横浜市出身で、大学時代から練馬アークスジュニアでコーチを務めている。大学では教職課程を履修し、最後まで教員になるか悩んだものの、サッカーチームでのインターンや練馬アークスジュニアでの指導経験を通して、学童野球チームを自ら設立する決断をした。就職を機に浜松市に引っ越し、慣れない土地でありながらも20代の若さで新たなチームの創設に至っている。



監督の石井悠喜氏

最初にWebサイトやSNSを開設し、2023年8月に第1回体験会を開催した。当日は年長から小学4年生までの子ども14名が参加し、大半が野球初心者であった。11月には第2回体験会を実施し、その後入会受付を開始する。2024年1月の初回練習時には既に定員に達し、4月に正式なチームとして発足した。7月の取材時点では、メンバーは3・4年生を主体とする15名、定員が空くのを待つ「キャンセル待ち」の子どもも約15名であったが、その後も希望者が相次ぎ、11月時点では「キャンセル待ち」が約25名に増えている。

指導スタッフは石井氏を含めて7名が在籍している。横浜や浜松で知り合ったスタッフ、提携チームであるビクトレ豊橋から来るスタッフ、静岡県野球連盟に所属するアスレティックトレーナー(AT)も含まれる。ATは浜松ASが連盟非加盟であることを理解した上で連絡を寄せ、スタッフとして協力している。日曜のみ来られるスタッフや、2ヵ月に1回程度参加するスタッフ



第1回体験会

もいて、基本的には石井氏が指導を行っている。

ユニフォームとキャップは青を基調としたデザインが採用され、用具は基本的に各自が持参している。会費は月 7,300 円で、練馬アークスジュニアと同様に野球チームとしては割高ではあると認識するが、指導者には謝金を支払っている。現在は対外試合を行っていないものの、2025 年春ごろには市内のチームと試合ができるよう検討している。また、石井氏は現在も度々上京して練馬アークスジュニアで指導しており、両チームによる合宿も実施している。ゆくゆくは、試合の実現も期待されている。

チームの運営方針は基本的に練馬アークスジュニアの指針を受け継いでいるが、石井氏は教員志望だったこともあり、教育的な視点を大切にして、夏休みの勉強会や練習前の宿題の時間を設けることもある。子どもたちへの声掛けにおいても、「楽しくやるためにはどういうことが必要だろう」「やるべきことをやらないで、やりたいことだけやるのは違う」というスタンスを大事にしている。

また、日ごろの練習では iPad や野球ノートを活用している。子どもたちは手慣れた様子でお互いのプレーを iPad で撮影し、動きの確認を行っている。野球ノートは目標や練習の振り返りを記入するものであり、浜松 AS では約 9 割が提出している。石井氏は「書きたいと思わせるような声掛けや仕組み作り」を意識し、月末にはノートを回収して一人ひとりに丁寧なコメントを書き、シールがたまったら野球グッズと引き換える仕掛けを取り入れている。ノートを確認することで、自身では分からなかった子どもの気づきや考え方を把握し、日々の指導に還元している。石井氏は「大人は教えすぎてしまう。野球ノートを見ると、子どもたちは学んだ

ことをひとつしか書かない。だから、教える時には難しく言いすぎず、伝える点はひとつに絞るよう意識している」と指導方針を明かす。

2. 活動中のチームや保護者の様子

2023 年 8 月に開催された第 1 回体験会では、初心者の子どもも対応できるよう基本的な動作の確認から始め、ゲーム形式の練習までが行われた。慣れない環境に緊張した様子の子どももいたものの、多くの保護者が見学に訪れ、あたたかい雰囲気の中で進化した。

複数の保護者に話をうかがったところ、保護者同士が知り合いのケースはほとんどなく、ネットや SNS で浜松 AS を知って参加したという。浜松市内のみならず、隣接する湖西市や磐田市などからの参加者もみられた。母親の一人によれば、浜松市内には同様に短時間練習・連盟非加盟・保護者当番なしを掲げるチームがあるものの、いずれも希望者が多く、小学 1 年生でも既に定員に達しているという。見学者は皆、東京から来たコーチによる新チームに大きな期待を寄せていた。

保護者が特に評価していたのが、「週末 1/4 ルール」(週末の土日を午前午後 4 分割し、そのうちひとつの時間帯を野球に使うという考え方)で、「地元のチームでは土日がすべてつぶれてしまうので参加できない」という声が多く聞かれた。また、保護者は異口同音に「地元の野球やサッカーのチームは本当に勝ちたい子しか入れない」と語っていた。さらに、母親からは「共働きのため土日の当番ができない」、父親からは「野球経験がないので審判は難しい」という意見も多かった。このような話は練馬アークスジュニアの保護者からも聞かれており、同じような意識の家庭が集まっていることがわかる。

石井氏は初期の段階では活動場所の確保に苦勞しており、この時の会場も市内北部のややアクセスが悪い場所であった。終了後には、保護者が石井氏に別の会場を紹介する場面もみられた。

チーム設立後の7月13日に訪問した際には、浜松市の中心部に近い和地山グラウンドで活動していた。野球場は4面あり、浜松ASを含め3チームが同時時間帯に活動していた。時折雨が強まるあいにくの天候で、この日の子どもの参加者は普段より少ない10名であった。最初は父親6名と母親1名がいて、数組の親子がキャッチボールをしていたが、活動が始まるとほとんどの保護者はその場を離れ、残った保護者はベンチや持参した椅子に座って見学していた。練習はかけっこやラグビーボールなどの大きなボールを使った運動から始まり、キャッチボールへと進んでいく。

保護者はしばらくの間、ゆったりと見学を続けていた。投球練習が始まると、子どもたちは投げるのに夢中で集球ネットにたまったボールの回収を忘れていた。その様子に気づいた父親2名が、自主的にボールを回収し始め、その後もボール拾いや用具の運搬などに協力していた。



投球練習の様子

試合形式の練習では、各チームで子どもた

ちが打順を決めていた。ピッチャーを務める石井氏に対して子どもが「ナイスピッチング！」と声をかけ、石井氏が「ありがとう！」と応じる場面もあった。第1回体験会では初心者ゆえのぎこちなさがみられたが、この頃にはゲーム形式の練習が十分に成立し、「めっちゃ楽しい!!」をテーマに掲げるチームらしく、笑い声や前向きな発言が絶えない明るい雰囲気広がっていた。頻繁に見学に来れる父親も「この数ヶ月ですごくうまくなった」と感心する。終盤には迎えに来る保護者も増えてきたが、怒声や罵声はまったく聞かれなかった。



打順を話し合う子どもたち

活動の最後に石井氏が子どもたちに話をしていると、数名の父親がグラウンドの整備を始めた。当番制はないため、手伝いをせずに見学している親のほうが多い。母親同士の会話が弾む様子もみられ、体験会の時にはなかった保護者間のゆるやかなつながりが感じられた。

活動中に数名の保護者に話をうかがったところ、「土日がすべてつぶれない」「勝利至上主義の否定」「保護者の当番なし」の3点が野球に参加するハードルを下げている、「できるかわからないけれど野球をやりたい」という子どもの希望にこたえやすいとのことであった。

保護者との関わりについて、チームを設立したばかりの頃には、活動内容や石井氏の声掛けに対して疑問や異論を持つ保護者もいたという。そのような保護者に対しても、石井氏はチームの方針や監督としての考えを丁寧に伝え、信頼関係を築きながら進めてきた。

また、20代でチームを立ち上げた石井氏は、監督としては周囲の指導者に比べて格段に若い。「僕も子どもを育てた経験がないので、保護者の方たちは先輩。それが良さでもあり、難しいところでもある」と述べている。一方で、ある父親は『指導者が足りないが、自分たちの方針に合う方をみつきたい』と監督がおっしゃったのがすごく理解できる。親としても中途半端な手伝いはどうなのかと迷うけれど、言ってくればやれることはやってあげたい』と監督の姿勢に理解を示し、協力的であった。石井氏も『来てくれてありがたい』と思ってくださる保護者、『応援したくなる』『助けたくなる』という思いの保護者がほとんど』と語る。

3. 課題と展望

浜松 AS にとって、唯一の課題は指導者不足であった。SNS でも頻繁に募集をかけてきたものの、応募はなかなか増えず、「そもそも絶対数として足りず、たとえ来ていただけてもチーム方針とミスマッチだと難しいので、二段階で困っている」と率直に語っていた。また、都心部でアクセスのよい練馬との地域性の違いや、「浜松に来て1年しか経っていないために

つながりが希薄な点」も背景にあると考えていた。

しかし、取材後の2024年11月、練馬アークスの中桐氏からの紹介をきっかけに、社会人野球部の選手経験があるコーチが参画することとなった。その結果、「キャンセル待ち」の子どもたちにも徐々に入会案内ができるようになったという。さらに、もう一人の社会人コーチや、学生コーチが加わる可能性もある。学生コーチの採用について、石井氏は「今までは積極的に考えられなかったが、自分も子どもたちとの関係性ができて余裕が出てきた」と心境の変化を語る。また、保護者にアンケートを実施し、保護者コーチの導入について意見を求めたところ、「今の体制がよい」という声が多かった。この結果を受けて、石井氏としても保護者コーチは設けず、現在の関係性を継続したいと考えている。

浜松 AS は静岡県内の複数のチームとも関係を築いている。当初は「チーム同士のすみ分け」を意識して、あえて浜松市内のチームとはコンタクトをとらないようにしていたが、LINEでほかのチームから連絡をもらい、交流が始まっている。こうしてつながりができたチームのひとつが3節で紹介する浜北太陽野球スポーツ少年団で、特に活動場所の確保に苦労していた時期には、監督の竹内氏から多大な協力を得た。石井氏も掛川市や静岡市のチームに自らコンタクトをとり、将来的には静岡県全体でのリーグ構想も視野に入れている。



子どもも大人も野球をあきらめない
主夫目線が叶えた地域のつながり
NPO 法人 北摂ベースボールアカデミー
(大阪府豊中市・箕面市)

理事長 植松 剛史 氏

2024年9月18日(水)・19日(木)、10月20日(日) 訪問

北摂ベースボールアカデミー(以下、北摂BA)は大阪北部の北摂エリア(豊中市・箕面市)を拠点に活動するNPO法人である。子ども向けの野球教室に加えて、成人向けのイベントや野球スクール、自治体や企業も巻き込んだ「豊中スポーツまつり」などの多岐にわたる事業を展開している。2022年3月には、スポーツ庁による第回「Sport in Life アワード」の団体部門優秀賞を受賞し、スポーツ人口の拡大に資する優れた取り組みとして評価されている。

1. チーム設立の経緯

北摂BAの理念の背景には、理事長を務める植松剛史氏の専業主夫としての経験がある。植松氏は小学校の教員を経て、2017年から専業主夫として家事や育児に励んできた。その間に周囲の「ママ友」から、野球は保護者の負担が大きく、習いごととしてのハードルが高いという声を聞くようになった。植松氏は「子どもに

スポーツを習わせるのは、健康に成長させるためだけでなく、親が子どもから離れて自分の自由な時間を確保する目的もあると、主夫をして実感した」と語る。

そこで「親の時間を奪わないチームであれば、参加者が集まるのではないかと考え、「入りやすくやめやすいチーム」「保護者の負担がないチーム」をコンセプトに、年長児から小学生を対象とした野球教室事業の立ち上げを決意した。学生時代にNPOに関わった経験をいかしてNPO法人北摂ベースボールアカデミーを設立し、2019年に「初心者のための野球教室」(以下、「野球教室」)を豊中市で開始した。まずは子どもが野球を楽しめるか気軽に試してほしいという思いから、ユニフォームは用意せず活動時の服装は自由とし、用具もチームで貸し出すなど、初期費用の負担を抑える工夫をしている。2022年には箕面市でも2カ所の教室を開講し、現在は豊中市の千里北町教室と箕面市の萱野教室が定員に達し、特に土曜日の萱野教室は多くの「キャンセル待ち」を抱えている。

指導者は10数名いて、知人の紹介やネットでの応募が多く、他チームでの指導経験があるコーチや小学生を初めて指導するコーチなど、経歴は多様である。シフトは各自の都合に合わせて組んでいる。保護者の当番はなく、会計担当は植松氏の「ママ友」に依頼し、用具



理事長の植松剛史氏

の管理・運搬、ビブスの洗濯、広報や活動情報の整理は、基本的に植松氏が担当する。

毎回の活動の最後には紅白戦形式の試合を行うが、リーグ戦などの対外試合には参加していない。植松氏は「試合のためのチームを作らない」と意識し、遠征や対戦相手を探す手間を省き、保護者の負担軽減につなげている。

「野球教室」とは別に、2020年に「野球場開放」事業も開始した。これは団体登録が必要な野球場の借り上げを北摂BAが行い、子どもたちに開放する取り組みである。会場にはバットやグローブ、軟球、ウレタンボール、テニスボール・ラケットなどが十分に用意され、子どもたちは用具を持参せずに参加できる。1時間ほど自由に遊んだ後、最後には紅白戦を行う。計46名が登録する人気の事業である。



貸出用具で遊ぶ子どもたち

これらの子どもの教室事業は黒字化しており、指導者やスタッフへの給与が支払われている。給与体系に関しては、最低時給からの昇給制度が明確に設けられている。指導者の中には、ボランティアではなく仕事を探す過程で北摂BAをみつけたコーチもいて、「このチームでは有休があるのがポイント」と話す。植松氏は「今までのスポーツはボランティアでささえられてきた部分もあるが、その仕組みを少し変えたほうがいいかなという思いがあった。最低

限、生活ができる状態にしたい」との考えを示している。

また、子どもたちが状況に応じて「野球教室」と「野球場開放」、既存の他チームを柔軟に選べるよう配慮している。「野球教室」は初心者が試せる場の提供を目的とし、レベルの高い環境で続けたい子どもには既存のクラブチームの紹介を重視している。さらに、ほかの種目や活動に興味をもち、一時的に「野球教室」を離れた子どもが再び戻る可能性も考慮している。

「野球場開放」に関しても、既存のチームに合わず参加するようになった子どもや、他チームに移った後で平日の練習場所を求めて参加する子どもがいる。北摂BA内でも、千里北町教室が活動する木曜日は6時間授業を行う学校が多く、高学年の子どもが参加しづらいため、水曜日の「野球場開放」に移ることも認めている。植松氏は「入ったチームに合わなくても、野球の道が断たれることなく、ほかの選択肢がある状態を作りたかった」と語る。

加えて北摂BAでは、成人向けの事業も拡大している。2021年には「女性のための野球スクール」と「大人の野球イベント」を開始した。前者は野球初心者の成人女性を対象とするスクールで、取材時点では23名が在籍していた。後者は「野球好きの大人」を対象とした個人参加型イベントで、キャッチボールやシートノックから始めて、後半には紅白戦を行う。メンバーが都合のよい時に気軽に参加できる点も好評である。「大人の野球イベント」の参加者が、子どもの教室事業や後述する「豊中スポーツまつり」のスタッフとして協力するなど、事業間の好循環もうまれている。なお、これらの活動内容はすべて、NPO法人の事業報告書として公開されている。

2. 活動中のチームや保護者の様子

水曜日に訪問した「野球場開放」では、平日の放課後のため、子どもたちは開始時間前に一斉に集合するのではなく、三々五々に来場していた。スタッフは植松氏とコーチ 1 名の計 2 名である。

この日は子ども 26 名、保護者 3 名(母親 2 名、祖母 1 名)がグラウンドにいた。子どもたちは自然とグループに分かれ、テニスボールを使って試合形式のゲームをしたり、コーチとピッチング練習をしたりと、それぞれのレベルや関心に応じて楽しんでいる。参加して間もない子どもには、植松氏が適切に声をかけ、自然となじめるように工夫している。

グラウンドに来ていた母親のうち 1 名は今回がまだ 2 回目の参加であり、もう 1 名は子どもが年長児であるため付き添いをしている。二人とも豊中市には多くの野球チームがある中、ネットで情報を集め、北摂 BA をみつけたという。もう一人の祖母は、「元々は母親が北摂 BA をみつけ、送迎を頼まれたが、今は自分の運動を兼ねて毎回ここに来るのが楽しみ」と声を弾ませる。コーチの到着が遅れていることに気づき、集球ネットを慣れた様子で組み立てる姿もみられた。その後もフェンスを越えたボールを拾いながら歩くなど、スタッフのように心配りが行き届いていた。

続いて木曜日に訪問した「野球教室」(千里北町教室)には、約 30 名の子どもが参加していた。水曜と同様に、子どもたちは三々五々に集まってくる。野球用のシャツやユニフォームパンツを着用する子どももいれば、普段着のハーフパンツやデニムで参加する者も多い。「野球場開放」と同様にバットやグローブはチームから借りられるように用意されているが、自前の用具を持ち込む子どもが大半である。



「野球教室」の練習

和気藹々とした雰囲気の中、「野球教室」では遊びだけでなく専門的な指導にも注力し、植松氏が作成した指導案に基づいた活動が実施される。当日は 15 歳の高校生から 75 歳までの 7 名の指導者が参加し、練習中は植松氏が全体を指導し、ほかの 6 名が個々の子どもたちに声掛けや指導を行っていた。



指導スタッフ

活動の終盤には 10 人弱の保護者が子どもの迎えや見学に訪れていた。ベンチから楽しそうに撮影する保護者、グラウンドの片隅でうたた寝をする保護者、バットを持ち子どもに張り切ってアドバイスする保護者など、それぞれのスタンスで関わっていた。「野球教室」も保護者の多くは「ネットでみつけた」と述べ、「子どもが厳しいチームには入れなかった」「親のことも

考えてくれて入りやすい」「平日にたくさんの方が子どもをみてくれるありがたさを感じる」など、チームの特徴を評価する声がよく聞かれた。

3. 課題と展望

北摂 BA の主な課題は、活動場所の確保である。新しい理念で団体を設立すると、さまざまな改革は進めやすい。しかし、既存の団体が多く場所を押さえており、学校開放も新規団体を受け付けていないケースがあるため、活動場所の確保が難しい状況にある。解決策として平日を活動日に設定したり、既存の団体と相談して活動場所を共用したりしている。また、「野球教室」のひとつである箕面市の石丸教室では、市内のサントリー箕面トレーニングセンターと交渉し、施設内の野球場を使用している。

植松氏は「野球教室」のみでは事業の収益としては十分でないと考え、将来的な展望としてプロ興行の立ち上げを視野に入れている。北摂エリアで町対抗のローカルなプロ野球を実施し、興行収入が上がれば野球の普及活動やコーチの給料、場所の確保などに充てる計画である。

その第一歩として、2023 年に地元の企業やスポーツチームを巻き込んだ「新千里野球まつり」を開催した。市内の町別対抗野球大会を核とした大がかりな地域イベントで、キッチンカーや子どものスポーツ体験コーナーを設け、「祭りがやっているからなんとなく来た人が、野球の試合も気軽に見て楽しめる」状態を目指し、約 800 人の集客につながった。

このイベントを発展させ、2024 年 10 月には「豊中スポーツまつり」を開催した。豊中市が主催するソフトボールの「第 57 回豊中市秋季市民大会」の決勝戦などをプログラムの一部に組み込み、会場周辺にベンチを設置し、実況も行って、選手だけでなく観客も楽しめる大会を模索した。

植松氏は「地域の会社と地域の人たちをつなぐお祭りになるように」と考え、地元の企業やクラブチームと連携している。協賛は 7 社にのぼり、そのうちの 1 社である市内のパナソニックホームズ株式会社は、当日会場で PR ブースを出展した。子どもの体験コーナーには、北摂 BA に加えて地元の豊中ラグビースクール、箕面学園高校、忍者ナインもそれぞれラグビー体験や体力測定のブースを提供した。現在は豊中市の助成金を活用しているが、将来的には協賛金のみで実施できる体制を目標にし、その先に地域のプロ野球リーグを構想する。

植松氏は「教室事業を全国展開する方法もあるが、広げるよりローカルにエリアを限定して取り組むほうが、子どもの活動が女性や大人の取り組みにつながる相乗効果は高いと思う。野球教室だけで収益を求めると、家庭に多くの物を買ってもらい、お金も出してもらうことになり、結局『野球をするのにお金がかかる』という現状は変わらない」と語る。さまざまな形で企業と連携し、スポンサー料を得る一方で、保護者には地元のサービスを楽しみながら利用してもらえるよう宣伝する。北摂エリアで継続的な関係を築きながら、子どものスポーツ環境が維持される仕組みを構築している。



できる人ができることを
監督と保護者がささえあう伝統チームの再出発
浜北太陽野球スポーツ少年団 (静岡県浜松市)

監督 竹内 豊 氏

2024年7月13日(土) 訪問

浜松アークスピリッツの石井氏から、同じ浜松市で活動する浜北太陽野球スポーツ少年団(以下、浜北太陽)を紹介していただいた。浜北太陽は、浜松市北部にある市立内野小学校を主な拠点とする少年野球チームである。練馬アークスジュニアや浜松アークスピリッツ、北摂ベースボールアカデミーが最初から現在の活動方針を掲げて新規チームを立ち上げたのに対して、浜北太陽は長い歴史のあるチームを改革した事例である。そのため、以下ではチーム改革の経緯を中心に紹介する。

1. チーム改革の経緯

浜北太陽は1982年創立、今年で43年目を迎える歴史あるスポーツ少年団である。2005年、現監督の竹内豊氏は、ご子息の入団と同時に保護者コーチに就任した。この時点でチームには20年以上の歴史がある。



監督の竹内豊氏

しかし前監督と保護者会の間でトラブルが

発生し、保護者が二度にわたり監督の辞任を要求する事態となる。その度に、保護者によって退団させられる団員も複数いたという。最終的には軟式野球連盟が仲介に入り、監督の辞任に至ったため、2010年には竹内氏が保護者監督に就任し、翌年のご子息の卒団後も外部監督としてチームに残った。

竹内氏は監督就任時に、保護者による「お茶当番」を廃止した。コーチ時代には、きょうだいの多い家庭の親が毎回のお茶当番を担当できず、それが原因で保護者同士のいさかいが生じ、子どもが退団を余儀なくされるケースがあったという。

ところが、影響力の強いごく一部の保護者が身勝手なふるまいを続けて竹内氏と対立し、状況は収束しなかった。連盟からも「監督が代わっても結局同じことが起きるのであれば、父母会に問題があるのでは」と懸念を示され、その後、チームは「父母会」の解散に至る。しかし騒動を経て6年生が一斉に退団し、さらに前監督時代の「風評被害」も続いて新規の団員は増えず、チームは一時期団員2名にまで減少した。このため、およそ7年間は公式戦への参加もままならない状況が続いた。

苦しい時期が続く中で、2019年に同じ浜松市内で活動する浜松タツツズから練習試合の打診を受ける。浜松タツツズは今年で創立14年目を迎える連盟非加盟の野球チームで

ある。しかし、連盟では規定に基づいた活動や大会の実施を原則とし、基本的には連盟に加盟するチーム同士での対戦が一般的である。そのため、当時連盟に加盟していた浜北太陽は、遠回しに注意を受けることとなった。そこで竹内氏は、「現在は公式戦ができる状況にない。この先も公式戦を目指すなら連盟に加盟したままのほうがよいが、目指さないのであれば、連盟を外れて自由に活動しようか」と保護者に提案し、話し合いを行う。結果、浜北太陽は連盟非加盟での活動を選択する。ただし、代替わりした後の保護者が再加盟を希望する場合に備え、竹内氏は連盟に話を通している。

ここからチームにおける数々の改革が始まる。活動方針に「脱勝利至上主義」を掲げ、活動日時は土日いずれかの午前とした。試合はTカップ大会という自主大会を開催していたが、現在はオールジャパンベースボールリーグに参加している。同リーグは全国各地で軟式野球のリーグ戦を開催し、各チームが対戦相手や日程、球場や審判を調整する「自主対戦方式」を採用している。試合規定では、「小等部大会」には、「日本国内で活動する学童軟式野球チームであれば、どのチームでも」参加でき、「大会規約にのっとり、マナーを厳守したフェアプレーができること」を参加資格としている。

浜北太陽では、練習出席率が上位の子どもを優先して試合に出場させている。同率の場合のみ学年や入団順のアドバンテージがあるものの、低学年の児童でも練習への参加が多ければ試合に出場できる仕組みである。

また、公式戦出場に伴う遠征費などが不要になったため、会費は以前の月 3,000 円から月 2,000 円に減額された。竹内氏は、指導者が報酬を得るべきという価値観を十分に理解しながらも、自身はあくまでボランティアとして関

わり続けたいという思いから、報酬を受け取っていない。

保護者の関わり方も大きく見直された。廃止した保護者会に代わり、現在は 3 年生以上の各学年から保護者の代表 1 名を出してもらい、6 年「代表」、5 年「会計」、4 年「会計補佐」、3 年「監査」と監督の計 5 名で構成する「役員会」を組織している。役員会においては 5 名が同等の議決権をもち、基本的には話し合いを行い、決まらない場合には多数決を採用する。

当番制を設けていないため、普段は送迎のみを行う保護者も多い。一方で、約 40 名の団員に対して常駐する指導者は竹内氏と外部コーチ 1 名であり、年に 2 回行われる保護者会では「当番のシステムはなくすが、関わる大人が多いほうがよい活動はできる」と伝えている。こうした意図を保護者も理解し、自主的に参加して練習を補助する父親が一定数みられる。

また、会費 2,000 円のうち 500 円は「サポート会費」として管理され、活動をサポートする父親たちの忘年会費や、野球応援のガソリン代の補助などにあてられている。このようにして、参加する保護者と参加しない保護者の差を埋める工夫がなされている。

竹内氏は保護者会でトラブルが起きていた頃を、「指導者が少数で保護者が多数のため、議論の分が悪く、会長が勝手に『全体の意見』と言えば全体の意見ということになってしまう。正常な議論ができない」と振り返る。また、保護者の役割については「指導者や先生を子どもに向かせること」と述べる。父母会を解散し、子ども・指導者・保護者の理想的な関係性を明確にしたことが、現在のチームにおける保護者の関わり方を形づくったといえる。

このような改革の結果、近年は団員が急増し、ほかの少年団から「なぜそれほど集まるの

か」と聞かれるほどになっている。竹内氏や保護者は、そのきっかけを2018年9月から始めたFacebookと推察する。Facebookの「自己紹介」欄には、「お茶当番、父母会が無いチームです。親が忙しく、既存の野球チームに参加出来ない子供たち中心に親同士も和気あいあいと活動しています。」と書かれ、当番なしの方針が前面に打ち出されている。

現在、2年生以上は定員に達したため新規入団を断っている。活動方針に共感して選んだ家庭が多いため、団員は内野小学校区に限らずさまざまな学区から通っている。1学年7名を定員としているが、実際には9～10名、現在は総勢32名で活動している。

竹内氏は定員を超えても、ひとり親の家庭や発達障害児、きょうだいが障害児の子どもなどは例外的に受け入れている。そもそもの保護者も同じサポートができる前提には立っておらず、「できる時にできる人ができることを」「できない世帯を責めるのではなく、やってくれた世帯に感謝をする」という方針が掲げられ、保護者内にも浸透している。



竹内氏と子どもたち

2. 活動中のチームや保護者の様子

訪問した日は変わりやすい天気の中、8時半から12時まで活動が行われた。内野小学校のグラウンドは広く、別のサッカーチームと半面ずつに分けて使用している。朝の時点で子

ども30名弱と父親8名が集まっていた。必要な用具はグラウンドの倉庫にあり、子どもも父親も慣れた様子で取り出している。父親たちはバックネットなどの大きな備品を運んだり、サッカーチームとの境目にネットを張ったりと積極的に準備を進めている。子どもたちは背中に名前が入ったおそろいのユニフォームを着用し、刺繍入りのエナメルバッグを持参している。練習に参加していた父親によると、団員数が急増したため、背中の名前で誰かを判断しやすくなり、非常に役立っているという。

低学年を中心としたティーボールなどを行うグループと、高学年を中心に実戦練習ができるグループに分かれ、バッティングや守備練習、試合形式のプレーと続く。父親8名は、技術指導をする者、ボール拾いに協力する者、写真撮影や、参加率の高い団員への参加賞を準備する者など、それぞれが多様な立場で活動をささえている。低学年・高学年いずれのグループにもコーチに近い役割を担う者がいるため、父親だけでも多くの活動を円滑に進められる。父親たちは「来られる時に来ただけだから大変ではない」「来るのが好きで楽しい」と口々に語る。

チームに長く携わり保護者の中でも中心的な父親は、「普段練習に来ない親、来られない親にはなるべくやりやすい仕事をお願いしている」と語り、夫が海外在住で乳児育児中の母親は、「子どもの練習はお父さんたちがみてくれて、自分は自宅で簡単にできる作業を任されているので、助かっている」と感謝する。活動終了の時間が近づくと、迎えに来る保護者の数も増える。乳幼児連れの保護者も多く、子どもたちから目が離せない様子だが、可能な保護者は片付けに協力し、自然と「できる人ができることを」サポートする状況がうまれている。



試合形式の練習



片付けに協力する保護者

浜北太陽の入団申込書には「浜北太陽を選んだ決め手」という欄がある。具体的な記述をみせてもらおうと、「勝利至上主義ではないという点と保護者負担が少ないという点」「連盟に入っていない。家族の時間も考えてくれている。」「親の負担が少ないということも決め手ですが、何より楽しくのびのび野球ができる。だけど時間を守る、簡単に休まない、上手い下手だけでなく努力を認めてもらえる、という事を大切にしているところ」(いずれも誤字以外は原文通り)など、改革を進めたチームの特徴を保護者も理解し、選択した様子が見えがえた。

3. 課題と展望

浜北太陽はスポーツ少年団として活動しているため、本章で取り上げているほかのチームとは異なり、活動場所の確保に問題はない。

一方で指導者の確保は他事例と同様に課題といえる。この点について、竹内氏は「今に限ったことではない。これまでも潤沢に指導者がいた時期はない」と語る。

解決を目指し、2026年度には浜松タツツズとの合併を予定している。一般的にチーム間の合併は、子どもの数が減少しやむを得ず行われる「消極的合併」が多く、調整が難航したり合併後に先細りしたりするケースが珍しくない。それに対して、竹内氏は今回の合併を「積極的合併」と位置づけている。両チームともに団員数に余裕がある中での決断であり、事故防止や子どもの安全確保を徹底しつつ、選手ファーストの理念で団員がよりよい環境で成長できるチーム、保護者が安心して子どもを入団させたいと思えるチームを目指している。

新チームではタツツズの現監督が「監督」に就任し、竹内氏は「ゼネラルマネージャー」として活動をささえる。練習にも参加し、ヘッドコーチの役割を担いながらも、主には対外調整や保護者対応を受け持ち、監督が子どもたちの指導に専念できる環境づくりを進める。

さらに試合の対戦相手を確保するため、浜松市および近隣市内における連盟非加盟のチーム同士の話し合いを進めている。浜松市を中心とする静岡県西部地域では、過去2年間で浜松アークスピリッツをはじめとした連盟非加盟のチームが6チーム新設されている。これらのチームとタツツズ、浜北太陽が連携し、竹内氏は中心的存在となっている。

将来的には、連盟加盟チームと非加盟チームが交流できるよう、連盟との交渉や新リーグの設立も視野に入れている。また、リーグ内で定員に達したチームがある場合には、希望者に別のチームを紹介するなど、各チームが適正な人数で活動できる環境も検討している。



学童野球に新たな選択肢を

ジュニア・エンジョイ・ベースボール・コミュニティ (JEBC)

中桐 悟 氏 島本 隆史 氏 齊藤 宗章 氏

2024年12月10日(火) 座談会開催

第3回のセミナーから約4ヵ月後の2024年4月1日、中桐氏は小中学生の野球チームが集う組織「ジュニア・エンジョイ・ベースボール・コミュニティ」(JEBC)を立ち上げた。JEBCには、北海道から沖縄までの30チーム(2025年1月時点)が参加し、「第二の選択肢」として、現在の社会環境やニーズに適応した先進的な野球の場を増やす取り組みを推進している。また、セミナーで紹介されたPCGリーグを引き継ぎ、「INTINITY BASEBALL LEAGUE U-12」(インフィニティ・ベースボールリーグ U-12)という新リーグを始動している。

今回は、中桐氏を含む実行委員メンバー3名に、JEBC結成の経緯や今後の展望に加え、学童野球の課題や保護者の理想的な関わり方について、幅広く語っていただいた。

1. 自己紹介・チーム紹介

中桐 練馬アークス Jr.ベースボールクラブ(以下、練馬アークス)の中桐です。私自身は野球経験がほとんどありませんが、「外部のリソースを活用し、保護者の負担を減らしながら、みんなに楽しく野球をしてもらおう」というコンセプトでチームを運営しています。

島本 練馬アークスは子どもたちが程よく熱量をもちつつ楽しんでいる、そのバランスが最高。

齊藤 クラス分けされて、トップクラスの子たちはより上を目指していますよね。練馬アークスの子はみんなうまいです。サードの子がバックハンドで捕ったり、走りながら片手で捕ってファーストに投げたりしていました。

中桐 正面に入れる打球は正面に入るように伝えていますが、バックハンドにトライしたことを否定はしません。みんな勝手にうまくなっています。



練馬アークス Jr.ベースボールクラブ代表
中桐 悟 氏

島本 さいたまインディペンデント(以下、インディペンデント)の島本です。私はずっとサッカーをしてきましたが、仕事で野球メディアに携わった縁で、子どもの野球に関わるようになりました。自分の子どもが小学生になり、野球をやらせたいと思って、2022年に「元気・感動・繋がり」をコンセプトにしたチームを立ち上げました。

齊藤 インディペンデントは野球だけでなく、

ラグビーやサッカーなどいろいろなスポーツをやっているのがすごい。野球でもコーチが下投げでボールを投げて、子どもたちが思い切り飛ばして、本当に楽しそうです。

島本 野球をやるハードルを低くしたいと強く思うので。小学生のうちは楽しくプレーし、中学生になっても「野球をやりたい」という気持ちを持ってもらえたらと思います。

中桐 あとは指導者の質がすごい。全国の学童チームと比べても比類ないレベルです。



さいたまインディペンデント代表
島本 隆史 氏

齊藤 ポジティブベースボールクラブ(以下、ポジティブ)の齊藤です。私は小学3年生から野球を続けてきました。2022年に今のチームを立ち上げ、今年で3年目です。「子どもたちと仲良く楽しく野球をする」というコンセプトで運営しています。

中桐 齊藤さんのチームは、とにかく雰囲気が良いですね。保護者も含めての、ファミリー感。あの一体感はどうやって醸成したのですか。

齊藤 うちは野球の練習だけでなく、都市対抗を観戦したり、遊園地やアスレチックに遊びに行ったりします。そういう時に保護者も来てくれるので、自然と仲良くなります。チームとしては送迎だけで十分なのですが、保護者も一緒に活動に参加してくれることが多いです。

島本 あのわちゃわちゃ感、好きですね。元気がない時がないです(笑)



ポジティブベースボールクラブ代表
齊藤 宗章 氏

2. JEBBC の結成

中桐 野球をする子どもの減少に強い危機感を持っていて、このままでは野球界全体が縮小すると感じました。でも島本さん・齊藤さんをはじめ、私のチームと同じような考え方で運営をしている方が全国にいます。そこで「お互いを刺激し合い、高め合い、しっかりと発信もしていこう」というコンセプトで、コミュニティの立ち上げを考えました。

島本 立ち上げに際して、中桐さんが私たちに声をかけてくれました。私自身も野球メディアの仕事をしてきた中で、情報が共有されていないことで損をしているチームや人をたくさんみてきたので、横のつながりを作りたいと感じていました。

齊藤 私はPGCリーグでお二人と交流があり、話をもらいました。「何か後ろ盾がほしい」というのも、きっかけになった思いのひとつでしたよね。

中桐 国内の学童野球チームの多くはいわゆる「連盟」(全日本軟式野球連盟)かスポーツ少年団に属しています。どちらも歴史ある組織で素晴らしい面もたくさんあり、否定するつもりはありません。ただ、必ずしも今の社会の流れにフィットしていない部分もあります。

学童野球の大きな課題のひとつは、指導者の質の問題です。もちろんすべてのチームにあてはまるわけではないですが、まっとうな指導者から論理的に野球を教えてもらえない環境があるのが課題だと思います。練馬アークスではコーチには謝礼を払って教えてもらう体制をつくっています。

島本 練習時間の長さも課題だと思います。私自身も親なので、土日に子どもにスポーツをさせたいと思う一方で、家族の時間も優先したいというバランスの問題を感じています。

齊藤 うちも共働きだけど、やはり土日がすべて野球だと家族でどこにも行けないし。休みなしだよ。練馬アークスの練習時間はどのくらいですか。

中桐 最長で4時間です。

島本 うちも3時間、長くて4時間ですね。

齊藤 うちも4時間です。あと、学童野球ではどうしてもトーナメント戦で勝つために、うまい子ばかりが試合に出る。その子が肘を壊すこともある。

中桐 少子化で1チームあたりの人数が減っているの、余計にそういう問題がありますね。

島本 2~3年生が6年生の試合に出るとか、体力的にはきついですよね。子どもの環境は関わる大人が守っていかないといけないと思います。

中桐 同じような課題意識をもち、連盟に属さずに運営するチームは全国で増えています。そのような「新しい選択肢」を広げることで、学童野球の縮小を少しでも食い止めることができるのではないかと考えています。

島本 まさに「選択肢」のひとつです。旧来型のチームに入るのも良いですが、そのほかの受け皿が少ない現状を変えることが、子どもたちの将来につながると思います。

齊藤 野球は連盟やチームによって、ルールやボールが異なる。そうしたカテゴリーを超えたコミュニティがあればいいよね。

島本 特に少年野球は、つながっているようでつながっていない。国内のプロ野球が盛り上がっているのに、なぜ学童野球の組織はそれぞれが独立して連携していないのか疑問に感じています。

齊藤 学童野球は野球人口の入り口ですからね。選択肢を増やして、野球を始めやすい環境を作ってあげられたらいいですね。

中桐 これからチームを立ち上げる人や、野球を始める子どものハードルを低くしたいと思います。チームを立ち上げるのは大変なことだと思われていますが、ホームページとユニフォームを作ったら一丁上がり(笑)

齊藤 本当にそう。それで、JEBCに加入してもらいたい。

3. JEBCのこれまでの活動

中桐 2024年4月には、JEBCに所属するチームで集まって、野球教室を開催しました。島本さんのご紹介で、社会人野球やプロ野球で実績のあるコーチに来ていただきました。初回は東京でやりましたが、今後は全国に広めていきたいです。

島本 8月には勉強会も開催しました。大手教育会社に勤務する東大野球部出身の方を呼んで、勉強の習慣づくりについて語ってもらいました。私たちはスポーツと勉強の両立も大事にしています。オンラインですが、熱心なチームからは4~5人の親御さんが参加してくれました。

齊藤 JEBCの全体ミーティングもオンラインでやりましたね。各地域やチームの課題を話してもらったり、ご質問をいただいたり。

中桐 地域によって違う悩みもあれば、同様の悩みもありました。共有して皆で解決策を語られて、すごく有意義だった。ほかには、チームの立ち上げ支援や既存チームの変革支援も行っています。支援したチームには、JEBCにご加入いただいています。

島本 最近では、これまでつながりのなかったチームからも連絡がありますね。少しずつ認知が広がってきたのかな。

中桐 全国に学童野球チームは1万以上あるといわれているので、まだまだです(笑)

「INFINITY BASEBALL LEAGUE U-12」についてですが、2020年に神奈川を起点に始まった学童野球の私設リーグ「PCG」(プレーヤーズ・センタード・ゲームズ)が前身です。このリーグは非常に先進的で、勝敗だけではなくポイント制を導入しています。たとえば「全員が出場したら1ポイント」「ピッチャーを2人以上交代で1ポイント」など、子どもたちを真ん中に、勝敗よりも子どもたちの成長をいかに促すかを主眼に置いています。練馬アークスも加盟して、試合をしてきました。今回PCGからご相談をいただいて、2025年度からは当方で引き継ぎ、コンセプトはそのままにリーグ名称を「INFINITY BASEBALL LEAGUE U-12」に変更してリニューアルする予定です。12月1日から加盟チームを募集し、すでに首都圏だけでなく静岡、栃木、兵庫にも広がっています。これを全国に広げていきたいです。

島本 基本的なルールは決まっているけれど、細かい事情を考慮してチーム同士でルールを相談できるのも良いですね。

齊藤 「野球を始めたばかりの子の場合は下投げでもいい」とかね。本当にやりやすかった。皆一緒に出場できるからいいよね。保護

者もベンチにいる子どもより、試合に出ている姿を見たいですよ。

中桐 試合を通じた成長はものすごく大きい。トーナメント戦だと負けられない戦いが続くので、監督は勝てるメンバーを選びます。PCGはリーグ戦で、基本的には「全員出場しよう」というレギュレーションなので、チームとしての成果より、子どもたちの成長を優先できる点が良いと思います。あとは、新リーグでは試合のマッチングの仕組みを変えました。オンラインのプラットフォームを入れたので、マッチングにかかる運営の負荷がだいぶ軽減されると思います。リーグ戦ですが総当たりではないので、好きなタイミングで好きなチームと試合が組めてフレキシブルです。

島本 運営の負荷は本当に大きかった。表には見えない部分で大変なことが多いので、システムで解決できるのは良いですね。

4. JEBCが考える保護者の役割

齋藤 ポジティブベースボールクラブでは、保護者の当番制はなし、父母会の設立は禁止しています。これも、学童野球を始める上で大事な選択肢のひとつだと考えます。保護者の手伝いがどうしても必要になる場面も多々ありますが、できるだけ私たち運営陣・指導陣でサポートをしています。

島本 私たちも父母会等はありません。任意で一緒に入って練習に参加してくれる保護者が何名かいます。保護者が自分の子を褒めるのは普通だと思いますが、うちのチームではほかの子どもにも積極的に声掛けしてくれます。その雰囲気づくりは、すごく助かっています。大人が一緒に入って練習することで子どもの見本にもなり、安心感にもつながりますし、何よりも明るくなって場が盛り上がるのが

いいですね。

齋藤 私たちも、お手伝いを申し出てくれる方にはやってもらいます。ほかのクラブに比べて、うちの保護者は見守っている人数が多いのではないかと思います。練馬アークスはどうですか。

中桐 普段は、数名の保護者に練習と一緒に参加していただき、ご見学の保護者もちらほらいらっしゃいます。手伝いではなく「一緒に参加する」という定義にしています。教えるのはあくまでコーチで、教え方がぶれないように、そこだけは気を使っています。

齋藤 うちが保護者から「コーチをやりたい」と言われれば、資格の勉強をしてもらった上で、野球経験に関わらず担当してもらっています。練馬アークスは、保護者のコーチは一切いないのですか。

中桐 私たちの場合は「保護者負担ゼロ」とはっきり標榜しているので、明確に線を引いています。保護者の中には、びっくりするような野球の経歴をお持ちの方もいらっしゃいますが、スタッフと保護者は明確に分けて考えています。JIBCとしては、保護者の関わり方については、各チームのスタンスを尊重していきたい、正解はないと思います。

島本 ただ、当番制などで親御さんの負担が増えるのはどうか。

齋藤 そうですね。負担が大きすぎるとは良くありません。JIBCとして、保護者向けの勉強会やコンテンツの配信もできたらいいですね。

島本 保護者のチームへの関わり方も学童野球の重要な課題のひとつですよね。どのように関わっていくのが正解なのか、運営者は迷うところではないでしょうか。

中桐 子どもと保護者の適切な関わり方や距離感については、言語化するのが極めて難

しいです。ただ、適切な距離感で関わる家庭のお子さんは、野球がうまくなるスピードが速い。言い過ぎるでもなく、無関心でもないというか。たとえば子どもが「キャッチボールしよう」と誘ったら、おそらくたくさん相手をしています。でも細かな指導まではしていないと思います。親から頭ごなしに「こうしろ」「ああしろ」と指導するのではなく、子どもが自発的にいろいろ考えてうまくなって、チームの練習で確認して、また家で親と一緒に考える、そういう関わりが理想的ではないかと思います。

齋藤 子ども自身がうまくなりたいと思って、「お父さん、練習手伝って」と自ら発信できるような家庭環境も大事です。

島本 そういう家庭の子は勝手に練習をしてうまくなりますよね。そうした環境をどう作っていくか、仕事と家庭のバランスをとりながら子どもに向き合っていくのはけっこう難しいですね。

齋藤 難しい。仕事から疲れて帰ってきて、ゆっくりしてビールを飲みたい時なら、「あとにして」と言いがちですよ(笑)

中桐 しかも、自分が指摘したいことはちょっと我慢する。結論は、何も言わないことです。しっかり見守って、その時々で適切な情報や道具などを提供してあげる。

齋藤 一番難しいな。

中桐 難しいですね。一見遠回りにみえますからね。

5. JIBC の今後

中桐 先進的なチームが全国に広がりつつあるので、協働して活動の輪を広げ、微力ながら学童野球を少しでも持続可能なものにできるように尽力したいです。そのために、ほかの団体がやっていないような新しい施策を打

ち出して、いろいろな取り組みができればいいなと思います。

齋藤 まずは JEBC 加盟チームで選抜チームを結成し、オープン大会に出場してみようと考えています。子どもたちには選抜チームで新たなスキルや可能性を発見してもらい、チームに還元してほしいです。今、エントリーを募集中です。ゆくゆくは埼玉選抜、東京選抜、神奈川選抜などがどこかのグラウンドで一堂に会して大会をするのも面白いと思います。

島本 自分のチームだけだとどうしても視野が狭くなる。ほかのチームのうまい子や特徴ある子とコミュニケーションを取り、交流が増えていくと面白いですね。あとは、チーム同士で集まってキャンプをしたり、ワンデイ大会のような JEBC カップもぜひ開催してみたい。子どもたちが寝食を共にして、野球以外で交流する機会も積極的に設けたい。スポーツを通していろんな経験をして、中学、高校、その後の野球人生の礎にしてもらいたいと思います。

中桐 トーナメント戦では、全国大会まで進まなければ全国のチームと交流するのは難しいと思います。リーグ戦で来られるチームを招待すれば、勝ち上がらなくても全国のチームと交流できます。

齋藤 学童野球はどうしても勝ちを求め、大人のエゴで子どもたちを使ってしまうイメージが今も少しあると思います。もっと子どもたちのために、野球を始めやすくする取り組みのひとつとして、JEBC があると思います。

中桐 少子化が相当のペースで進んでいます。今の小学 6 年生の人口は約 100 万人ですが、昨年(2023 年)生まれた子どもは約 70 万人で、この十数年で 30 万人以上も減ってい

ます。その中で、野球人口はそれ以上の割合で減少しているわけですから、野球界が現状から変わらなければ、早晩野球をやる子どもがいなくなる危機感があります。私たちは野球が楽しいスポーツだと思っていますし、子どもの成長にとっても絶対に有意義だと信じています。同じように考えている人が全国にたくさんいることは確実なので、憂いているだけでなく行動を、「その一歩を一緒にやりませんか」と伝えたいです。

島本 「やる人がいないのであれば、僕らでやろう」ですよね。幼少期、幼稚園ぐらいからボールに触れる機会を作ることで、野球に興味を持つ子が増えると思います。また、大人が教えすぎてしまって野球が嫌いになる子どもも多いと思うので、指導の仕方を変えていきたいです。

齋藤 そうですね。JEBC や新リーグでまずは楽しく野球を始められる環境を作り、「クラブやチームは子どもたちのためにある」というメッセージをどんどん発信して、ひとりでも多く野球を始める子が増える—そういう活動になればいいと思います。

